



# 「世界史の構造」読後感

E-149

SCE・Net 小松昭英

発行日

2021.9.22

この「世界史の構造」を、新型コロナウイルス(COVID-19)の封じ込めに成功したといわれる台湾で、中心的な役割を担ったオードリー・タンが自ら著した「オードリー・タン デジタルと AI の未来を語る」(2020)<sup>1</sup>で知った。この本(柄谷行人(2010)(2015)<sup>2</sup>)で、『交換様式X』として次の表1(一部加筆)が示され、次のように説明されていた。

表 1 柄谷行人の「交換様式X」

	不平等		平等	
拘束	B	略取と再分配 (支配と保護)	A	互 酬 (贈与と返礼)
	C	商品交換	D	X
自由	B	国 家	A	ネーション
	C	資 本	D	X

①知り合いと見返りの関係になって交換するパターン

②知り合いと見返りの関係にならずに交換するパターン

③見知らぬ人と見返りの関係になって交換するパターン

④見知らぬ人と見返りの関係にならずに交換するパターン

そして、交換様式という視点から、過去に遡って多くの事例をあげ議論

していた。そのうち、印象に残った小文を以下に列挙する。なお、著者「柄谷行人」は、哲学者、文学者、文芸批評家で、主な概念は構造主義・ポスト構造主義・価値形態論の再吟味、トランスクリティーク、アソシエーション、イソノミアなどである(Wikipedia)。

- ・ヘーゲルがとらえた資本・ネーション・国家の三位一体性を見失わないようにすることである。そのためには、生産様式ではなく、「交換様式」から世界史を見るという視点が不可欠である。歴史的に、どんな社会構成体も、複数の交換様式の結合として存在する。
- ・ヘーゲルにとって、物事の本質は結果においてのみあらわれる。すなわち、彼は物事を”事後”から見るのだ。一方、カントは物事を”事前”から見る。未来に関して、われわれは予想できるだけで、積極的に断定することが出来ない。それゆえ、カントにとって、理念は仮象である。だが、それは「超越論的仮象」である。
- ・「物質代謝」の意味が広く意識されるようになったのは、化石燃料、特に石油を使用するようになってからである。それによって、「物質代謝」はもはや農業あるいは土地に限定された問題ではなくなったからだ。石油はエネルギー源だけでなく、洗剤、肥料、その他の化学製品の原料としても用いられる。したがって、そこから生じる産業廃棄物は、グローバル(地球的)な環境問題をもたらした。
- ・マルクスが「資本制生産に先行する諸形態」で示した、社会構成体の歴史的諸段階は、原

始的民族的生産様式・アジア的生産様式・古典古代的奴隷制・ゲルマン的封建制・資本制生産方式である。

・資本主義の世界史的諸段階

	1750-1810	1810-1870	1870-1930	1930-1990	1990-
世界資本主義	重商主義	自由主義	帝国主義	後記資本主義	新自由主義
ヘゲモニー国家		イギリス		アメリカ	
経済政策	帝国主義的	自由主義的	帝国主義的	自由主義的	帝国主義的
資本	商人資本	産業資本	金融資本	国家独占資本	多国籍企業
世界商品	繊維産業	軽工業	重工業	耐久消費財	情報
国家	絶対主義王権	国民国家	帝国主義	福祉国家	地域主義

- ・ネーションは、互酬的な関係をベースにした「想像の共同体」である。それは、資本制がもたらす階級的な対立や諸矛盾を越えた共同性を想像的にもたらす。
- ・贈与とお返しという互酬が成立するのは、定住し備蓄することが可能になったからであるといつてよい。・・現在でも、国家による強制をもってしても、遊牧民を定住させることは容易でない。狩猟採集の民族の場合にはなおさらである。彼らが遊動的生活を続けたのは、必ずしも、狩猟採集の対象を求めて移動する必要があったからではない。たとえば、食料が十分にあれば定住するかといえば、そうではない。それだけでは、彼らが霊長類の段階から続けてきた遊動的バンドの生活様式（数家族の結合からなる通常 100 人に満たないきわめて小規模の社会単位で、一定の領域内で移動生活を営む。生業基盤が弱いため、生活は成員の相互援助によって支えられている）を放棄するはずがない。彼らが定住を嫌ったのは、それがさまざまな困難をもたらすからだ。
- ・定住した共同体はリネージ（リネージともいう、同一の出自によって共通の祖先につながるという意識をもち、また互いの系譜関係を明確に知っている人々によって構成されている）にもとづき、死者を先祖神として仰ぐ組織として再編成される。こうした共同体を形成する原理が互酬交換である。
- ・『資本論』でマルクスは、資本主義生産を、機械の発明や使用からでなく、資本によるマニファクチャー、つまり「分業と協業」という労働の組織化から考察した。機械はもっと前から存在していたが、それが実用されるにいたったのはマニファクチャーが発展した後である。
- ・考古学的に時代を画する「青銅器」や「鉄器」といったものは、生産手段としてよりもむしろ国家による戦争の手段（武器）として考案され発達させられたのである。
- ・秦は法治主義を奉じる宰相、商鞅によって強国となり、その後、始皇帝によって帝国を築いた。集権的な広域国家は、旧来の民族的な門閥貴族を制圧し、法治主義を徹底し、度量衡を統一するといった理論によって可能になったのである。
- ・官僚制の基盤は文字にある。文字は、多数の部族や国家を統治する帝国の段階において不

可欠のものとなった。文字言語から標準的な音声言語が作られたのである。

- 最も早いと思われる貴金属貨幣は、メソポタミアにおける銀の貨幣である（エジプトでは金への愛好があったが、貨幣としては用いられなかった）。ここで注意すべきことは、次の点である。等価物から世界貨幣への移行は、等価物が全面的に世界通貨にとってかわられることを意味するものではない。領域国家（帝国）の下に多数の国家、部族共同体が従属しつつ存在するように、世界通貨の下に多数の等価物・一般的等価物が従属しつつ存在するのである。世界通貨は現実には、国際的な交易の決済にしか使われず、国内ではもっぱら等価物や一般的等価物が使われた。だが、それを見て、世界通貨がまだ存在しなかったと考えてはならない。
- 彼（アリストレス）にとって、商人が交換から利潤を得るのは「不正義」であった。だが、奴隷を強制的に働かせることは「正義」だったのだ。同様に、古代専制国家では、賦役貢納によって富を蓄積することは正しいが、流通から富をうることは正しくないと考えられた。
- ギリシャでは、コイン（銀・金のような貴金属のほかに、銅や鉄のような卑金属）が採用された。これは、交易で用いる対外貨幣（貴金属）と、市場で用いる対内貨幣（卑金属）が互換的になるということの意味する。これによって、市場と交易が同じ価格体系のシステムの中に入ったのである。なぜギリシャのポリスでそのようなことがあったのか・・・ギリシャでは集権的な体制がなく、価格を統制する官僚機構がなかったからだ。官僚機構を形成するかわりに、市場による価格の調整にゆだねられたのである。
- 価格の決定を、官僚ではなく市場に任せたということが、ギリシャの民主政をもたらした要因である（ポランニー）。市場の判断に任せることは、政治的には、大衆の判断に任せるということである。すなわち、国家の王や官僚あるいは少数の賢明な指導者の判断よりも、大衆の判断のほうが正しいということ含意する。プラトンやアリストテレスが民主主義と市場経済に反対したのはそのためである。彼らは、中央集権的な国家による統制と自給自足的な経済が望ましいと考えたのである。それは、スパルタないしは東洋的な国家をモデルにするものであった。
- 中国の帝国がユーラシアの規模にまで拡大した時、法家思想（秦の始皇帝）や儒教（漢の武帝）による統一では不十分になった。版図が飛躍的に拡大した唐王朝において、仏教が導入されたのはそのためである・・・そうした世界宗教はまた、帝国内および周辺の部族・国家にも浸透する・たとえば、日本の大和王朝も自らの基盤を固めるために仏教を必要とした。
- 通貨の鑄造を開始したイオニアの人々は、アジアの専制国家のように国家官僚による価格統制を行わず、それを市場に任せたのである。価格の決定を、官僚ではなく市場に任せたということが、アルハアベツトの改良とならんで、ギリシャの民主政をもたらした要因だといわれる。
- 貨幣経済の浸透は、多くのポリスを揺るがした。アテネでもスパルタでも、それが深刻な

階級分解をもたらしたからである。市民の多くが債務奴隷に転落してしまったことは、自弁武装の皆兵制をとっていたポリスにとっては、ただちに軍事的危機を意味した。したがって、ポリス存続のために、社会的改革が不可欠だとみなされたのである。

- アテネにおいては、外国人はどんなに富裕であっても土地をもてず、市民にもなれなかった。彼らは法的に保護されないのに、高い税を課されていた。また、アテネの市民は、建前は農民であるが、実際に農業に従事しなかった。戦争に行くため、また国政に参加するため、労働を奴隷に任せたのである。土地はあっても奴隷をもたない者は、市民の義務を果たせない。市民であるためには、奴隷が必要である。ゆえに、デモクラシーの発展が、ますます奴隷を必要としたのである。
- 封建制に関して、ウェーバーはさまざまな封建制のタイプをあげているが、その中で、ゲルマン的封建制の特質は、レーエン（歴史学・社会学における技術的・法学的意味での封建制度を指す用語）封建制（人的誠実関係とレーエンが結合している）にある。さらに、ウェーバーは、この人的誠実関係にもとづくが、荘園領土権の授与をとみなわないタイプの封建制として、日本にあった「従士制約封建制」をあげている。
- ヨーロッパ南部では、フィレンツェが 1115 年、コムーネ（自由な都市国家）であることを宣言した。それを支えたのは、毛織物業などの商工業者のギルド（同業組合）である。ヨーロッパ北部では、1112 年、ケルンの大司教が新しい城壁内のすべての住民が市民として参加する「自由のための誓約共同体」を公認した。これが自由都市（コミュニオン）の法的な成立である。その基礎は商工業者のギルドであった。自由都市の成立によって、商工業者は一つの身分、ブルジョア（ビュルガー）としてあらわれた。こうして、西ヨーロッパに三千以上の自由都市が成立し、それを拠点として、宗教改革やブルジョア革命がおこったのである。
- マルクスもウェーバーも日本に封建制が成立したことに注目した。・・・この場合の封建制は、人的誠実関係、すなわち、主人と家臣間の封土―忠誠という相互的な契約関係にもとづく体制を意味する。アナル学派のマルク・ブロックやブローデルもこの事実注意到注意を払った。・・・なぜそれがありえたのかを説得的に説明しえたのは、ウィットフォーゲルだけである。・・・一言でいうと、彼は日本の封建制を、中国の帝国に対して亜周辺に位置したことから説明した。・・・日本で、中国の制度を導入して律令性国家が作られたのは七世紀から八世紀にかけてである。・・・とりわけ東国地方で、開墾による土地の私有化と荘園制が進んだ。そこに生まれた戦士＝農民共同体から、封土―忠誠という人格関係にもとづく封建制が育ち、旧来の国家体制を侵食はじめた。十三世紀以後、武家の政権が十九世紀まで続いたのである。

その間、朝鮮では中国化がますます進み、十世紀には高麗王朝で科挙（官僚の試験選抜制度）が採用された。文官の武官に対する圧倒的優位が確立された。しかし、日本では、すべてにおいて中国を範と仰いでいたにもかかわらず、科挙は一度も採用されなかった。文官を嫌う、戦士＝農民共同体の伝統が強く残ったのである。

とはいえ、古代の天皇制と律令国家の体制はかたちの上で残され、権威として機能しつづけた。それは、封建的国家が、旧来の王権を一掃するかわりにそれを崇めることで、正統性を確保したからである。それが可能だったのは、外部からの征服者がいなかったせいでもある。

- 国家は多数の都市国家や部族共同体を軍事的に従属させることで成立する。しかし、軍事的な征服や強制だけでは安定した永続的体制をつくることはできない。支配者に対する貢納や奉仕を、支配者の側からの贈与に対する被支配者の返礼というかたちにしてしまう必要がある。それが、宗教の役割である。ゆえに、このような宗教は国家のイデオロギー装置である。被支配者（農業共同体）は、神に自発的に服従し祈願することによって助けを得ようとする。その神は王＝祭司の手に握れている。神への祈願は王＝祭司への祈願である。

ゆえに、宗教的な位相を見ないと、氏族的共同体が国家に転化していくプロセスを理解できない。それは宗教がまさに「変換」という経済的次元に根ざしているからだ。経済と政治・経済は不可分離である。たとえば、国家の神殿は供出物を備蓄し再分配する倉庫でもあった。読み書きに堪能な祭司階層は同時に、国家の官僚機構でもあった。また、天文学や土木工学を発展させた科学者（ここは、技術者といってほしかった）でもあった。

- 「呪術から宗教へ」の発展とは、氏族社会から国家への発展にほかならない。それに関して、ウェーバーもこう述べている。呪術師はどこでも先ず雨乞い祈祷師であるが、メソポタニアのように国家による灌漑農業がおこなわれるところでは、呪術師はもう機能しない。収穫をもたらすのは、水を引いてくる灌漑施設を造る国王であるとみなされる。ゆえに、国王は絶対視される。国王は、荒漠たる砂の中から収穫をもたらす。世界を「無から創り出す」神という観念の源泉はそこにある。
- 貨幣経済は個人を共同体の拘束から解放し、帝国＝コスモポリスの人民とするだけではない。その「急進的平等主義」は、共同体にあった平等主義、いいえれば、互酬的な経済と倫理を破壊してしまう。つまり、それは貧富の差をもたらすのである。この二つの条件が、普遍宗教があらわれる前提である。要するに、普遍宗教は、帝国が形成される過程で、交換様式Bの支配の下で交換様式Cによって交換様式Aを解体していった時点で、それらに対抗する、交換様式Dとして出現したのである。

というように、交換様式にもとづく議論は、殆どが初耳ともいえるような印象深いものであった。また、その時間的、空間的あるいは概念的に広範囲にわたる議論には、よく理解できたかどうか不安が残らないわけではないが、敬意以外のなにものでもない。

文献

---

1 オードリー・タン、オードリー・タン デジタルと AI の未来を語る、プレジデント社、2020

2 柄谷行人、世界史の構造、岩波現代文庫、岩波書店、2015